

# 英語の不定詞関係節について\*

戸澤隆広

## 1. 導入

(1a)の角括弧で囲まれた部分は不定詞関係節と呼ばれ、その特徴の一つは法的解釈を持つことである。(1a)の不定詞関係節は *should* の解釈を持ち、「今日すべき宿題」という意味である。一方、(1b)の *that* 関係節は法的解釈を持たず「ボストンに住んでいる友人」という意味である。

- (1) a. I have an assignment [to do today].
- b. I have a friend [that lives in Boston].

本論では、「V NP to 不定詞」型で、目的語を関係節化した不定詞関係節を扱う。この不定詞関係節は *be to* 構文の構造を持つと主張する。この主張に基づき、不定詞関係節が法的解釈を持つことに説明を与え、また不定詞関係節の先行詞に課される定性制限に説明を与える。

## 2. Be To 構文と不定詞関係節

*be to* 構文と不定詞関係節には類似点がある。第一に、両者には「予定・未来」、「義務」、「可能」の意味がある。*be to* 構文と不定詞関係節はそれぞれ(2)と(3)に示される。

- (2) a. The next meeting is to take place in Hong Kong. (予定・未来)
  - b. You are to show your student card at the entrance. (義務)
  - c. Not a sound was to be heard. (可能)
- (3) a. I have a book to read on the train. (予定・未来)
  - b. I have some pictures [to show you]. (義務)
  - c. Let's find something [to sit on]. (可能) (安井 (1982: 143))

(2a)の *be to* 構文は「予定・未来」を表し、「次の会議は香港で行われる予定」という意味である。(2b)は「義務」で、「入り口で学生証を見せるべき」という意味である。(2c)は「可能」で、「音を聴くことができなかつた」という意味である。不定詞関係節にも「予定・未来」、「義務」、「可能」の意味がある。(3a)の *to read* は「未来」の意味で“*I will read*”、または「予定」の意味で“*I am planning to read*”と言い換えることができる。(3b)の *to show you* は「義務」で“*I should show you*”の意味になる。(3c)の *to sit on* は「可能」で“*we can sit on*”の意味になる。

第二に、*be to* 構文と不定詞関係節は「yet to 不定詞」の形を認める。*be to* 構文では、(4)のように「is yet to come」で「最も厳しい気候はまだ来てない」という意味となる。

- (4) The most severe weather is yet to come.

不定詞関係節も「yet to 不定詞」の形が可能で、これは(5)に示される。

- (5) And the future is naught but a present yet to come, or a repetition of the past. (COCA)

不定詞関係節の *yet to come* が *present* を修飾し、「まだ来ていない現在」という意味となる。

## 3. 提案

*be to* 構文と不定詞関係節の類似性に基づいて、不定詞関係節では音のない *BE* が *CP* を補部にとると主張する<sup>1</sup>。例えば、(6a)の不定詞関係節の構造は(6b)である。

- (6) a. I have some letters to write.
- b. I have [some [NP [N letters]; [BEP BE [CP *t<sub>i</sub>* [TP PRO [to write *t<sub>i</sub>*]]]]]]]

音形のない *BE* が不定詞節の *CP* を補部にとることで *be to* 構文を形成する。関係節の主要部繰り上げ分析により、先行詞の *letters* が関係節内から *CP* を経由し、先行詞の位置に移動することで *letters* を主要部とする不定詞関係節が派生される<sup>2</sup>。本提案では、不定詞関係節の法助動詞の解釈を説明できる。(7)を考えよう。

- (7) I have [some [NP [N pictures]; [BEP BE [CP *t<sub>i</sub>* [TP PRO to show you *t<sub>i</sub>*]]]]]

*BE* が不定詞節の *CP* を補部にとることで *be to* 構文を形成する。*pictures* が *CP* を経由して先行詞の位置に移動することで不定詞関係節が派生される。不定詞関係節は *be to* 構文の形のため、「義務」の意味が得られる。

## 4. 帰結

*there* 構文には定性制限が課される。定性制限とは *there* 構文の意味上の主語は不定名詞句でなければならぬとする制約である。(8)を考えよう。

- (8) a. There is a wolf at the door.  
 b. \*There is the wolf at the door. (Milsark (1977: 4))

(8a)で、there 構文の意味上の主語が a wolf のように不定名詞句の場合は文法的だが、(8b)のようにそれが定名詞句の場合は定性制限により非文となる。Belletti(1988)は there 構文の定性制限を部分格に基づいて説明している。Belletti は、be 動詞などの非対格動詞は部分格を与えるとしている。(9)を考えよう。

- (9) there [vp is a wolf at the door].



be 動詞が名詞句 a wolf に部分格を与える。部分格を持つ名詞句は「～の一部」の解釈を持つ。この解釈は a wolf のような不定名詞句と意味的に整合するが、定名詞句とは意味的に整合しない。従って、there 構文の定性制限が得られる。本論では Belletti の定性制限の説明を採用する。これを踏まえ、(10)を考える。

- (10) a. There is someone to blame. (COCA)  
 b. There is someone to blame



(10a)は“someone is to blame.”と言い換えることができることから、(10a)は be to 構文と there 構文が関わる文であると言える。そうすると、(10b)のように be to 構文の be が someone に部分格を付与する。ここで、不定詞関係節を議論するが、本論では、(11)のように不定詞関係節は音形のない BE を含む。

- (11) [NP Ni [BEP BE [CP ti C [TP PRO [to [v\*P ... ti ]]]]]]



(10a)の be to 構文の be が部分格を付与するのと同様に、不定詞関係節でも音形のない BE が先行詞の名詞句に部分格を付与する。そうすると不定詞関係節には定性制限が課されると予測し、この予測は支持される。

- (12) a. I bought a toy to amuse myself with. (Green (1973: 19))  
 b. \*I bought the toy to amuse myself with. (Green (1973: 20))

(12a)のように不定詞関係節の先行詞が不定名詞句の場合は文法的だが、(12b)のように先行詞が定名詞句の場合は非文になる。これは定名詞句の解釈が部分格と意味的に整合しないためである。

## 5. 結論

本論では「V NP to 不定詞」型の不定詞関係節では、音のない BE が不定詞節を補部にとると主張した。この主張に基づき、不定詞関係節の法助動詞解釈と先行詞の定性制限に説明を与えた。

\*本研究は JSPS 科研費 JP24K03957 の助成を受けている。本稿は日本英文学会北海道支部大会(2025年10月13日)シンポジウム「A/A'-distinction をめぐる問題—最近の極小主義の観点から—」における発表に基づく。発表の際に貴重なご助言をくださった先生方に感謝の意を表したい。

1. Jespersen (1949: 262–263)では、“... *the man to go* means ‘the man who is to go, should go’, etc., ...”と述べられている。本論の主張は Jespersen の供述を参考にしている。
2. letters は移動先で NP を形成する。構成素のラベル付けについては Chomsky (2013)を参照。

## 参考文献

- Belletti, Adriana (1988) “The Case of Unaccusatives,” *Linguistic Inquiry* 19, 1–34.  
 Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.  
 Green, Georgia (1973) “The Derivation of a Relative Infinitive Construction,” *Studies in the Linguistic Sciences* 3, 1–32.  
 Milsark, Gary (1977) “Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English,” *Linguistic Analysis* 3, 1–29.  
 Jespersen, Ott (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part V*, George Allen & Unwin, London and Ejnar Munksgaard, Copenhagen.  
 安井稔 (1982) 『英文法総覧』 開拓社, 東京  
 Corpus: Corpus of Contemporary American English (COCA)